

## 6) カタバミ＝酢漿草

カタバミはカタバミ科カタバミ属の多年草で、日本各地の道端、庭の陽溜まりに普通に生える。高さはせいぜい10cm程であるが、時には20cmを超えることもある。茎は地上を匍匐し、あるいは斜上し、匍匐根を出して殖える。葉は三枚のハート形が一つになったもので夜は閉じる。春から秋にかけて間断なく葉腋から花柄を出し、5弁の小さな黄色花を咲かせる。果実は円柱形で完熟すると種子をはじき出す。この種子の形状から「小人のキュウリ」という異名も生まれた。和名の由来はカタハミ(片喰)の意味とも、片葉が三枚ずつあるためともいわれている。別称としては茎や葉に酸味のあるところから、スイモノグサ、スグサ、スズメノスイコなどさまざまである。学名は『*Oxalis corniculata*』で、属名のオキザリスはこの種の総称として用いられることも多く、ギリシャ語の酸っぱいが語源になっている。また種小辞は角(ツノ)があるという意味で、これは果実の形状を表わしたものである。イギリスでは『yellow wood sorrel』とか『lady's sorrel』と呼ばれており、sorrelは「栗毛」という意味である。一方フランスでは『pain de coucon』で、こちらのほうは「カッコウのパン」を意味している。中国では『酢漿草』(サクショウソウ)と呼ばれ、漢方では全草がトラホームなどの時に洗眼薬として用いられた。生薬の汁は疥癬などの皮膚病に効くといわれ、真鍮や銀磨きにも利用されている。

カタバミは平安の昔からよく知られた植物だったと見えて、『枕草子』にも見ることができる。63段の「草は」には

沢瀉(モダカ)は、名のおかしき(をかしきが正しい)なり。心あがりしたらんと思ふに。三稜草(ミクリソウ)。蛇床子(ヒルムシロ)。苔。雪間の若草。こだに。かたばみ、綾の紋にてあるも、こと物よりはおかし(をかしが正しい)。

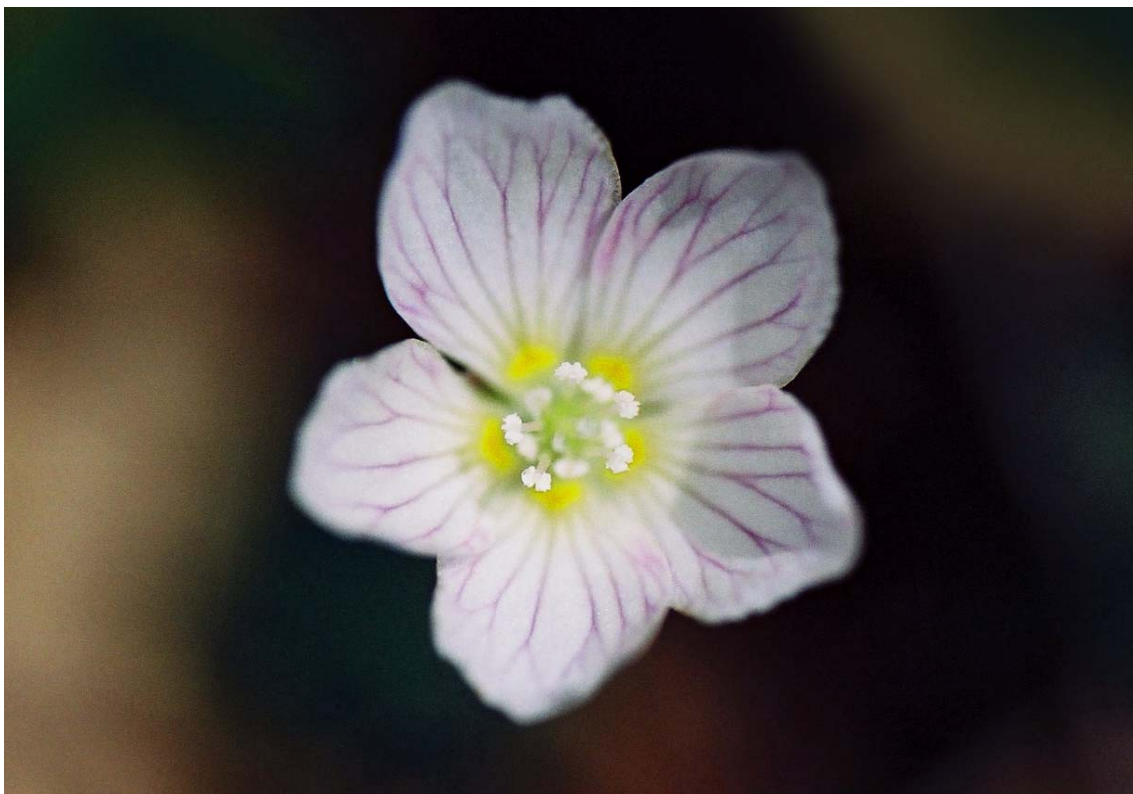
と記されている。冒頭のオモダカはオモダカ科の水性の多年草で(03-02-13参照)、ここではクワイのことであり、日本各地の水田や池沼に生える。ミクリソウはミクリ科の多年草で日本各地の池沼、水路などに生える。ヒルムシロはヒルムシロ科の沈水性多年草で、日本の各地の水田や池沼に広く自生する。つまりこの三種はすべて水性の植物ということになる。コダニは残念ながら定かではないが蔓性の植物であるといわれている。清少納言はいろいろな植物について、彼女独自の感慨を交えながら記しており、同時代の人々の中にあっても、ひととき植物通だったのだろう。

ヨーロッパでは毒を持った生物の、害を避けるお守りとして使われることもあった。これは皮膚病に効くところから、虫刺されに効くと混同されたのだろう。

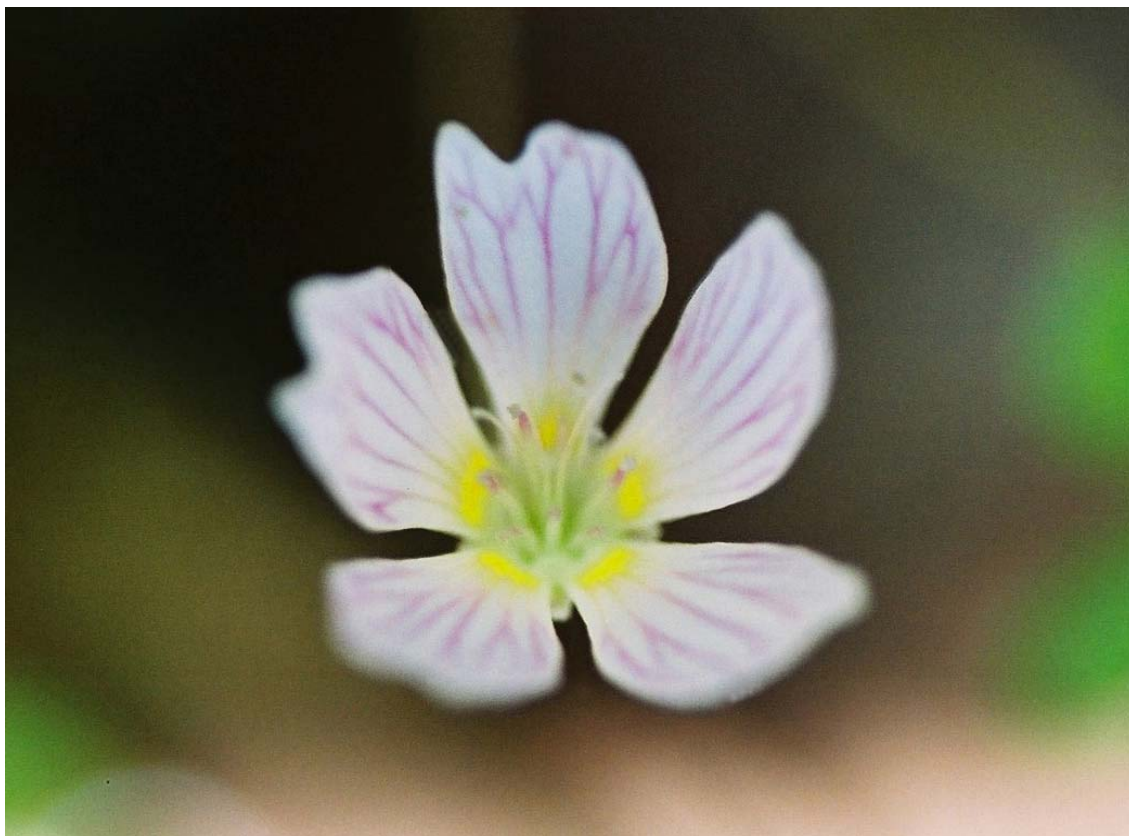
カタバミの葉を食べて育つ蝶がいる。ヤマトシジミという淡青紫色の可愛らしい小型の蝶で、北海道を除くほとんど全土に棲息し、3月下旬から暖地では12月頃まで見ることができる。余りにも普通の蝶であるために、誰も見向きもしないが、春この蝶を見かけたら、まもなく桜の季節がやって来る。



カタバミは日本のどこでも、最も普通に見られる雑草で、強い繁殖力を持っていることで知られている。匍匐根を出して横へ広がって増えるし、種子でも増える(さいたま市緑区)。



可愛らしい花を咲かせるコマヤマカタバミ。学名は『*Oxalis acetosella*』である(長野県入笠山)。



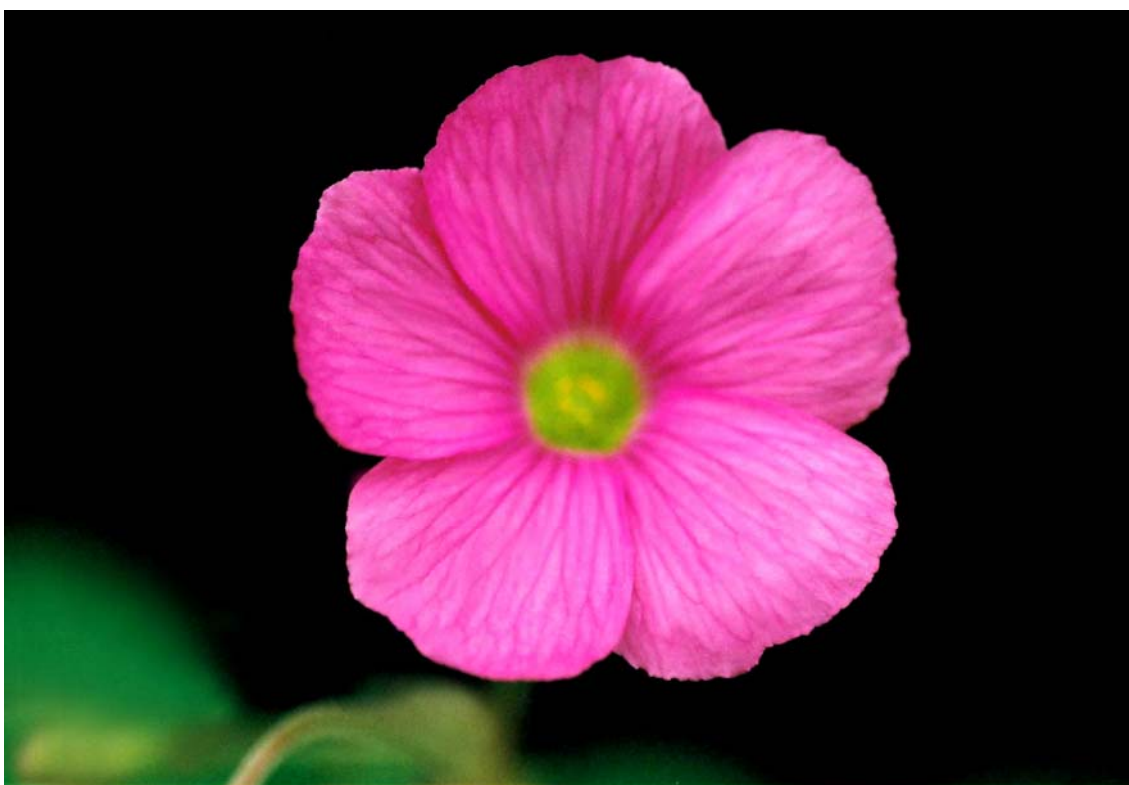
コミヤマカタバミ (長野県入笠山)。数人の登山者が花談義をしていたので、覗いて見ると、このコミヤマカタバミが咲いていた。登山者がいなかったら見過ごしていただろう。



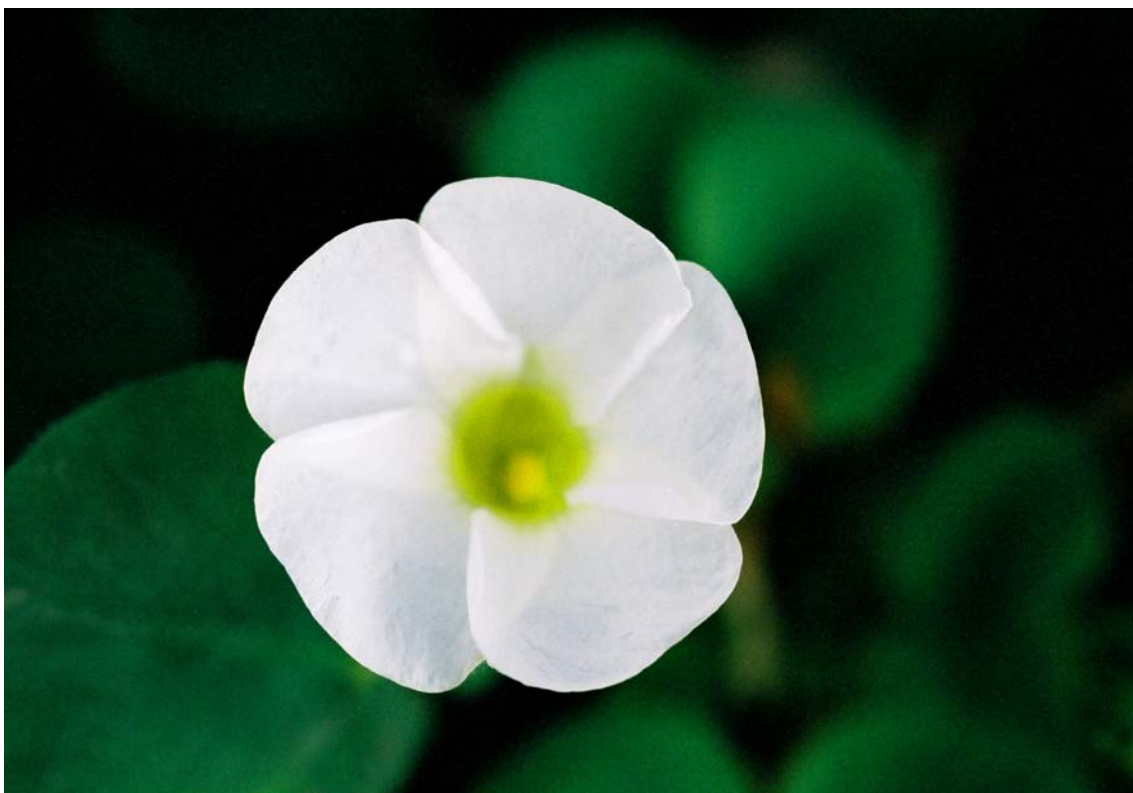
カタバミの果実をみると、小人のキュウリといわれる所以がわかる(さいたま市浦和区)。



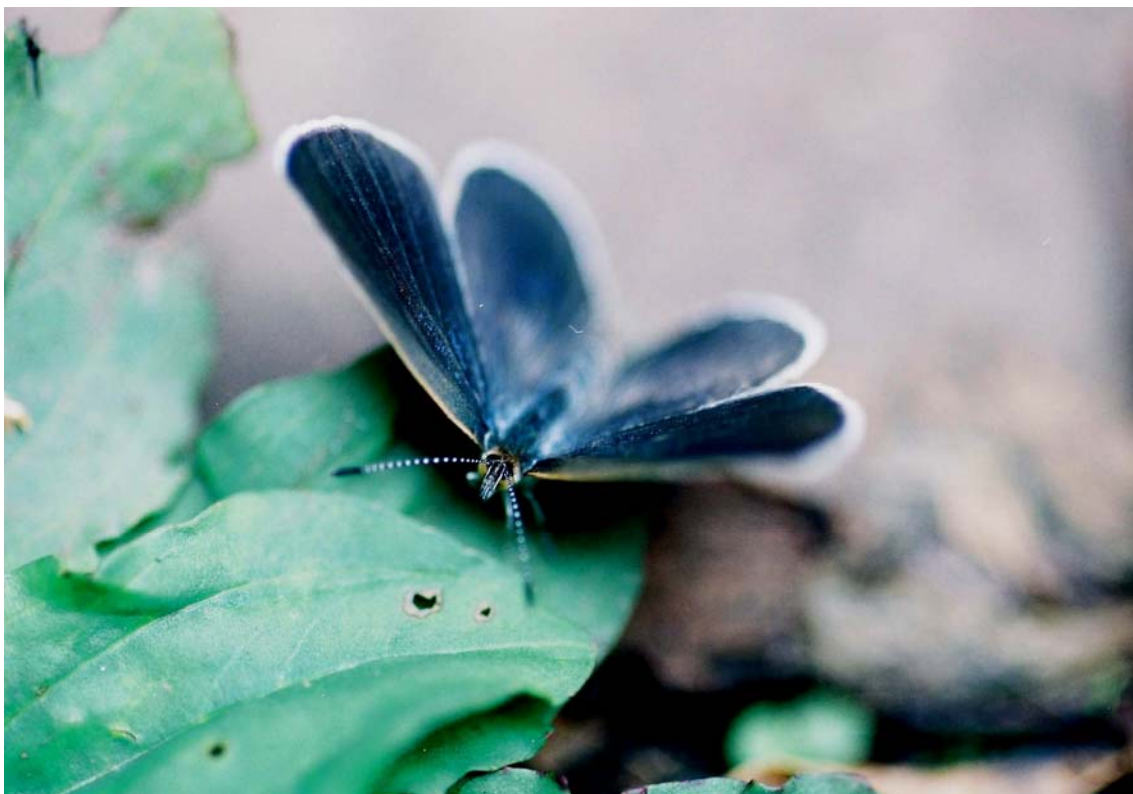
園芸種カタバミは種類も多く、なかなか捨てがたいものが少なくない。園芸種を総称してオキザリスとか、オギザリスなどと呼ぶことも多い。



ハナカタバミは色も濃く花も大きい。もともとは栽培種で、野生化したと思われる。



園芸種カタバミは花も大きく種々の色があつてなかなか美しい。しかし繁殖力は旺盛なため今では野生化しているものも少なくない。



カタバミを食草として育つヤマトシジミ♀ (埼玉県熊谷市)。

[目次に戻る](#)